

「世界のなかの高岡銅器 未来への歩みに向けて」

平成 26 年度 富山大学特別公開フォーラム報告

平成 26 年度 富山大学特別公開フォーラム「世界のなかの高岡銅器 未来への歩みに向けて」(富山大学 地域連携推進機構 地域づくり・文化支援部門主催)を、平成 26 年 10 月 11 日(土)にウイング・ウイング 高岡(高岡市生涯学習センター 4 階ホール)で開催した。パネラーには、菅谷文則(奈良県立橿原考古学研究所 所長)、廣川 守(泉屋博古館 学芸課長)、大熊敏之(富山大学 芸術文化学部 教授)、長柄毅一(富山大学 芸術文化学部 教授)の各氏をお招きし、三船温尚(富山大学 地域連携推進機構、副機構長)の司会で進行了た。

司会 ただ今より富山大学 平成 26 年度特別公開フォーラムを開催致します。開会にあたりまして富山大学 地域連携推進機構 地域づくり・文化支援部門長 古池嘉和よりごあいさつを申し上げます。

古池 主催者を代表致しまして、ひと言ごあいさつを申し上げます。昨今、高岡では新幹線の話が随分盛り上がっております。首都圏へ直結致しますし、夢も膨らむわけではございますけれども、こと経済においては、強い経済圏に引き寄せられてしまうということは、致し方ないことかもしれません。ただ、ある種の文化的な水準というのは、この高岡は高いものを培ってまいったように思います。本日の「高岡銅器」も、まさにその代表といえるようなものだと思っております。それはもう、東京がどうのこうのという話ではなく、世界の中で、その価値があらためて評価されるべきものではないかと考えております。ただ、残念ながら、こうした地域交流の価値は、ともしますと、肝心の地元のほうが低く見積もりがちであるということも、ままございます。

本日は、この高岡の青銅器を語っていただくのに、これ以上ない第一線の研究者の先生がたにお集まりをいただきました。多様な議論が展開されるものと期待をしております。どうか最後まで耳を傾けていただきまして、皆さまがたご自身の問題として高岡銅器のことを、お考えいただきますことをお願い申し上げて、私からのごあいさつに代えさせていただきます。

司会 それでは早速、話題提供に移ってまいります。これからの司会は地域連携推進機構 副機構長 三船温尚が務めさせていただきます。

【第 I 部 話題提供】

三船 I 部の話題提供では、お 1 人 15 分で青銅器に関するご発表をいただき、その後、II 部の討論会では

前半と後半に分け、前半では青銅器の歴史の再確認、後半では産業、芸術、文化、趣味など幅広く鑄造を討論しようと思います。それでは、廣川 守先生から「四千年前の中国青銅器までさかのぼる高岡銅器」と題して話題提供いただきます。

廣川 現代の、特に東アジアの金属工芸の源流になったといわれております中国古代の青銅器についてご紹介したいと思います。東アジアでは今から 5000 年以上前、中国で申しますと、新石器時代に当たりますが、その頃から、鑄造に蠟が使用され始めております。そして、紀元前 17 世紀頃から、青銅の容器が出現致しました。これらは実用品ではなく、お祀りの道具として使われたようでございます。東アジアの金属工芸の基礎となり、今日に至るまで、歴代の金工作品に少なからず影響を与えてきたといわれております。中国古代の青銅祭器、祀りの道具と申しましたが、主に祖先を手厚く祀るための道具として発展し、大切にされたようです。さまざまな祀りや儀式で用いられ数多くの種類が作られたようです。

祀りで使う酒を入れるためのさまざまな青銅器として、酒をためておく器、酒を運ぶ器(図 1)、お供えする器、酒を注ぐ器、温める器、あるいは飲む器などが作られました。お祀りで使う食べ物を扱う青銅器も作られました。肉を煮る(図 2)、食べ物をお供えする、穀物を盛る、蒸すなどの器が作られております。さらに楽器も青銅で作られ、打楽器などが多く作られております。釣鐘などは、大小セットで吊して使ったようです。

数多くの器を組み合わせておこなったお祀りや儀式の様子を今に伝える資料が、約 2500 年前の器表面の文様に見られます。2 階建ての建物の 1 階で釣鐘を吊るして叩き、2 階では高杯やら壺が置かれて宴会をしている。建物の外では肉を煮ているような風景があります。それでは次に、このような青銅祭器の特徴をご紹介します。

まず、青銅祭器の製作ですが、全て陶製の鑄型を組